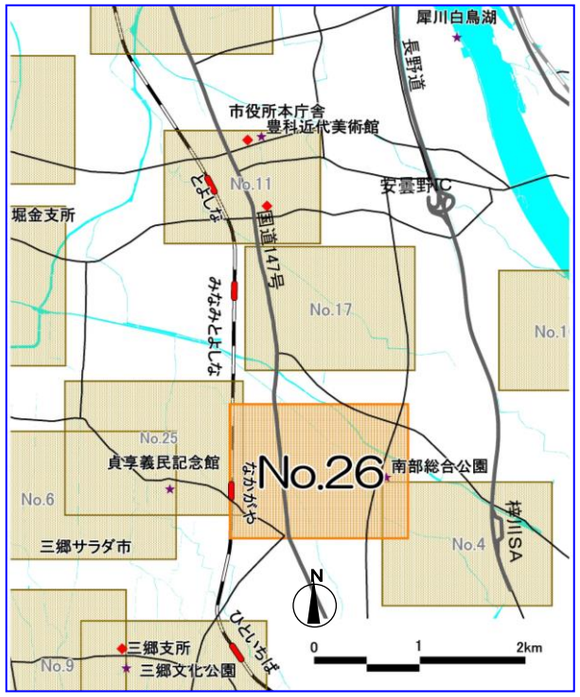
安曇野の原風景を巡る ふるさとウォッチングマップ

No.26

豊科鳥羽地区

ー段丘上の集落の生活文化を訪ねてー

安曇野市南部の鳥羽地区。現在、上鳥羽と下鳥羽に分かれている同地域は江戸時代の寛文6年(1666)に上下に分村を果たし、現在に至っています。河岸段丘の上に集落が展開し、用水の流末であることから水不足に悩まされた歴史があり、地区内には縦横に水路が張り巡らされています。また、村の中心にはかつては村人が共有で使用した井戸が残されており、往時をしのばせてくれます。



NPO法人 安曇野ふるさとづくり応援団
安曇野案内人倶楽部

※本マップは下記のサイトからダウンロード可能です
http://azumino-sanpo.info/

◆コースタイム　※時間は歩速3km/時としての目安です(休憩含まず)

スタート 豊科南部総合公園→約0.6km＊12分→鳥羽館跡→約0.7km＊14分→細田家の屋敷林→約0.7km＊14分→大同神社→約1.0km＊20分→勘左衛門堰と四土井跡→約0.5km＊10分→医王山日光寺→約0.4km＊8分→道祖神（握手像）と蚕影大神→約0.7km＊14分→石造物→約0.8km＊16分→豊科南部総合公園 ゴール【合計】約5.4km：1時間48分

(e)河岸段丘上に立地する集落
拾ヶ堰から南方向に見える特徴的な地形

(d) 道祖神と大黒天
安山岩と花崗岩の石造物の競演

(a)三輪神社
春の社日に祭事を執行する稲荷社

(b) 細田家の屋敷林
下鳥羽を代表する屋敷林のひとつ

(c)真鳥羽堰
千国道に沿うように北へ流れていく

【注】マップ内の情報はふるさとウォッチングを開催した2018年4月15日現在の内容です。

① 豊科南部総合公園

豊科南部総合公園は市内でも大きな部類の都市公園。広大な芝生広場を中心に、子供向け遊具や10面あるテニスコートなどが用意され、小さな子供から大人まで、多くの市民の憩いの場になっています。令和3年(2021)には新体育館も完成し、スポーツ・レクリエーションの拠点としての機能強化が図られ、市民の期待も高まっています。

芝生の広がる豊科南部総合公園

② 鳥羽館跡

出土した遺物などから鳥羽郷の開削拠点として中世の15世紀末には来住していたと推測されています。当時は東側以外の三方位に堀と土塁を巡らし、東西84m・南北72mを本郭であったそうで、現在は北西に堀と土塁の名残があり、館より西の西村小路には家臣の住まいがあったとされています。（※一部私有地への立入はご遠慮下さい。）

【鳥羽館跡：市史跡】

鳥羽館跡

③ 郷蔵跡周辺

かつて本郷の郷蔵があった場所に古井戸や石造物が立ち並んでいます。円筒石組井戸で、案内板によると深さは約19.5mとあります。水不足に陥りがちな河川の流末地域にあたる鳥羽地区はこうした井戸が大変貴重な存在でした。水不足がひどい年には多くの村人が井戸の前に列をなしたそうです。

【本郷の井戸：市有形文化財】

本郷の井戸

④ 大同神社

下鳥羽村の産土神。現在地より東の中村という地に鎮座していましたが、享保19年(1734)に現在地に移設されたといわれているます。元の場所が村中の田地にあって不浄であるとされたことや、西に隣接する中萱村との間の境界論争を緩和するための、境宮としての役割を持たせた等、その背景については諸説あります。

大同神社

⑤ 勘左衛門堰と四土井跡

貞享2年(1685)開削の勘左衛門堰は安曇野を代表する横堰のひとつで、下鳥羽地区を東西に貫いています。四土井跡は、拾ケ堰開削以前に本村、成相町村、下堀金村へと勘左衛門堰を分水していた場所で、その跡とされる場所に現在石碑が建立されています。

勘左衛門堰と四土井跡

⑥ 医王山日光寺

もとは三郷の平福寺末となる真言宗寺院で、明治の廃仏毀釈を経て現在は曹洞宗寺院となっています。当初は現在地より東方の寺村と呼ばれる地域にあったようで、元禄2年(1689)に現在地へ移されたとされています。一時期松本城下の安楽寺へ移されていましたが、その後元禄年間になり元に戻されたといわれています。

【仁王像：市有形文化財】

日光寺と仁王像

⑦ 道祖神（握手像）と蚕影大神

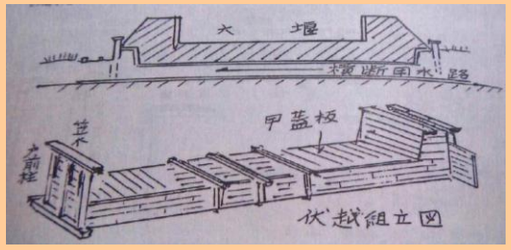
神殿に男女神の並ぶ双体像。千鳥破風の屋根、懸魚の部分には右から「道祖神」の文字が入った額が刻まれています。背景に見える常念岳や周囲の屋敷林とマッチした、安曇野らしい風景を見せてくれています。

道祖神（握手像）と蚕影大神

複雑な水路網

ここ安曇野市豊科下鳥羽地区における堰は、他地区と比べて水路が複雑で立体的な交差部分が集中しているところです。先人たちの工夫や苦労の一例を紹介します。

【地名：四土井】旧国道147号線と勘左衛門堰の交差点地区。勘左衛門堰の開削に当たって、ここから多方面に分岐した箇所。現地形より勘左衛門堰の水位が2m程高いところを通しているため、伏せ越し、小型のものは底樋（そこい）で立体交差させました。



(参考資料：命の水、豊科町教育委員会他)